

## 日本語学を応用した英日翻訳者用教材冊子 OJT 実践報告<sup>1</sup>

北村富弘

(法務省大阪刑務所 国際対策室)

### Abstract

*This paper reports an on-the-job training booklet designed to help inexperienced English-Japanese novice translators who are Japanese native speakers to learn how to produce natural Japanese texts from ST, English correspondence exchanged between prison inmates and their correspondents in this instance. Their TT often show features less frequent in natural Japanese text, such as frequent use of pronouns, lack of interpersonal expressions and excessive use of transitive verbs. The booklet, based on the application of Japanese Linguistics, presents features of the Japanese language, concept by concept, with easy-to-understand explanations and examples. This encourages the target learners to explore their own language sense and apply it when producing and improving their TT. After studying this booklet, the target learners are observed with their TT that indicates more natural Japanese features.*

### 1. 序

当室(法務省大阪刑務所国際対策室)における書簡和訳業務では、英語書簡の要所要所において、事実関係について精密な翻訳が要求されると同時に対人表現に配慮した訳文が望まれる。そのような要請がある中、経験の浅い翻訳者による訳文には、読み手である処遇担当職員等にとって事実関係や対人関係が分かりづらい文章がしばしば見られる。そこで、英日翻訳者の翻訳品質向上をねらいとして、短時間に訳文作成のポイントが学べるような OJT 用教材冊子を作成した。

読みにくい訳文の特徴として、たとえば代名詞明示の多用、待遇表現の不足、他動詞文の頻出等の傾向がみられる。これらは日本語の特徴であるゼロ代名詞の多用、待遇表現の広範さ、自動詞文優勢という傾向とは異なる。これに対応して、本報告で取り上げる教材冊子では、経験の浅い英日翻訳者に向けて、日本語の特徴を具体的かつ簡潔に提示し、意識付けることを試みた。

---

KITAMURA Tomihiro, "On-the-Job Training Booklet for English-Japanese Translators Based on the Application of Japanese Linguistics," *Invitation to Interpreting and Translation Studies*, No. 19, 2018. pages 175-196. ©by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

本冊子の掲載項目は、経験を重ねた翻訳者ならずすでに体得している事項であろうし、日本語学、対照言語学などの知見を学んだ人にとっては周知の事項であるだろう。しかし、そうではない翻訳者に対して本冊子の内容を提示することで、TL(目標言語)である日本語の特徴に気付かせ、同時に翻訳という行為のあり方について考えさせる機会を提供している。

冊子では、日英語の対照言語学的差異から日本語の具体的な特徴を個別に示しており、その中で日本語学の立場から TT の表現を分析することで翻訳作業への応用を促している。例文には、当室の英日翻訳業務に頻出する類の文を中心に掲載している。冊子の構成においてはなるべく各概念が見開きで完結するようにしている。これは、当室における執務時間内のごく短時間に一概念について振り返ることができるよう配慮したものである。

本報告では、最初に冊子設計上の意図を述べたのちに、掲載項目を概略し、その後、主な項目について掲載順に沿って、「日本語らしさ」の大きな特徴である「ナル言語」、「題述関係」に至る提示手順を示す。

## 2. 訳文指導の対象とねらい

### 2.1 指導対象者

指導対象者は当室の常駐通訳翻訳人である。日本語を母語とする場合、常駐通訳翻訳人の英語の運用能力は実用英語検定 1 級取得あるいはそれに準じる能力であるが、英日翻訳の実務経験はまちまちである。常駐通訳翻訳人は年間契約であるため、特に年度当初における翻訳技能にばらつきが大きい。したがって、冊子の編集方針としては業務としての英日翻訳が全く初めての場合を想定している。

### 2.2 指導対象となる訳文

訳文として書簡内の必要な情報を読み取りやすく記録しておくには、「日本語手紙文らしい文章」であることが求められる。仮に訳文に日本語として奇異な部分が目立つと、読み手にとってそれがノイズとなり必要な情報が取得しづらくなる。(北村 2016:107-108)

書簡翻訳は全文訳ではないが、箇所によっては原文を抜粋した上で、正確な翻訳を要する。しかしながら、「正確に」という指示から、経験の浅い翻訳者の場合、「文法構造再現訳」をしてしまうことがあり、このことから「日本語らしさ」に欠くぎこちない訳文になる。

例えば、以下の対訳例は、ST に対して TT1 が指導対象となる訳例、TT2 が日本語らしさを生かした訳例である。

ST: I asked my mother to send me a magazine, but she has never sent me anything.

TT1: 私が私の母親に雑誌を私に送るように頼んだのに、彼女は全然私に何も送ったことがない。

TT2: 母親に雑誌を送るように頼んだのに、全然何も送ってくれない。

従来の口頭指導において、経験の浅い翻訳者の和訳文の特徴として、代名詞の多用、対人表現の不足、他動詞文の頻出、また、引用表現や後置修飾が長い場合に訳文が不明確にな

るなどの傾向があることが見られている。このような訳文の場合、読み手にとっては対人関係や事実関係の把握に支障をきたすことがある。

### 2.3 訳文指導のねらい

先に述べたように、当室における書簡翻訳には「日本語らしさ」が求められることから、訳文指導では訳文の「日本語らしさ」を翻訳者に求めることが主眼である。

しかし、単に「日本語らしい表現」を翻訳者に要求したとしても漠然とした希望に過ぎず、また、訳例を示して「日本語にすれば自然にこうなる」と言ったとしても具体的には英語から日本語にどのような変換(翻訳シフト)が行われているのかが、翻訳者にとって判然としないことがある。であれば、「日本語らしさ」について具体的なポイントを指導対象者の理解に応じて段階的に示すことができれば効率的であろう(北村 2016)。そこで、本冊子では「日本語らしさ」の各要素を翻訳実務に即して提示することをねらいとする。

#### 2.3.1 問題点の整理 —— 「日本語らしさ」の要素

ここで先ず、指導対象となる訳例ではどんなところに「日本語らしくない」と感じられるのか、また逆に、望ましい訳文ではどんなところに「日本語らしい」と感じられるのか、これについて振り返り、問題点を整理しておきたい。

たとえば以下の対訳例を「日本語らしさ」に着目して分析すると、「日本語らしくない」要素や「日本語らしい」要素がいくつか抽出できる。

##### 例 1(再掲)

ST: I asked my mother to send me a magazine, but she has never sent me anything.

TT1: 私が(a') 私の(a') 母親に雑誌を私に(a') 送るように頼んだのに、彼女は(a')全然 私に(a') 何も送ったことがない(b')。

TT2: (a) (a) 母親に雑誌を(a) 送るように頼んだのに、(a) 全然(a) 何も送ってくれない(b)。

##### 例 2

ST: This process asks about prison records.

TT: この手続きの中では(d)、前科についての質問があります(c)。

例 1 の TT1 は指導対象例であり、「日本語らしくない」と感じられることのある要素 a' と b' が現れている。また、例 1 の TT2、例 2 の TT には以下のような「日本語らしい」と感じられる要素 a ~ d が現れている。なお a'、b' はそれぞれ a、b に対応する要素である。(なお、各要素の定義や詳細については本稿第 5 節で述べる。)

#### 要素 a「ゼロ代名詞」

例 1 で ST の代名詞が TT2 では文字として現れていない箇所である。TT1 においては代名詞が過剰に現れている(a')。代名詞が文字として文に明示されないことをゼロ化(ゼロ代名詞)というが、これは日本語の特徴の一つである。

#### 要素 b「待遇表現」

例 1 の TT2 において、never sent を「送ってくれない」と表しているが、「くれない」という表現で「母親」に対する恩義を表出している。これに対して TT1 にはそのような要素はない(b')。このような人間関係の配慮に関わる表現を待遇表現というが、これは日本語に頻出する言語表現である。

#### 要素 c「自動詞文」

例 2 の ST が「asks」を述語とする他動詞文であるのに対して、TT は「質問があります。」という自動詞文になっている。後者は日本語のナル言語としての特徴である。

#### 要素 d「主題・題述構造による表現」

例 2 の ST が「This process」を主語、「asks」を述語とする主語・述語構造を特徴とする表現をしているのに対して、TT は「この手続きの中では」を主題とする「～は～」構文を取っていて、主題・題述構造を特徴とする表現をしている。後者は日本語の主題優勢型言語としての特徴である。

このように、望ましい訳文には「日本語らしさ」の諸要素が複合的に表れていることがわかる。そこで、本冊子のねらいとして、こういった「日本語らしさ」の各要素を指導対象者に提示することを考えた。

### 2.3.2 日本語らしさの要素を提示することの有用性

次に、「日本語らしさ」の各要素を指導対象者に提示するということの有用性について検討しておきたい。

日本語を母語、英語を第二言語とする英日翻訳者の場合、一般的に言って、SL(起点言語)である英語についてはこれまでの学習を通じて客観的、意識的に学ぶ機会が非常に多かったものの、TL(目標言語)である日本語については、経験的に習得しており、言語としての特徴を意識的に学習する機会は比較的少なかったと言えよう。したがって、英語と日本語の語順の違い等、義務的な文法上の違いには気付きやすいが、こと「日本語らしさ」とは具体的にどのようなものかと問われても、指摘しづらいただろう。つまり、「日本語らしさ」を求められても、経験の浅い翻訳者の場合、各自の日本語に対する感性以外に拠り所とするものが得難い状態である。

しかし実際の翻訳作業においては、片や眼前の英語の構文とその表現法を目にしつつ、なおかつ英語使用者としての感性を使いながら ST を理解する一方で、その影響を受けずに感性のみで日本語を産出するというのは容易なことではないだろう。したがって、英日翻訳において翻訳者が自分の書こうとする日本語について、感性のみならず知的にも言語の特徴を意

識していることができれば、より日本語らしい文章が産出できるだろうし、その知識をもって TT の推敲をすることもできるだろう(北村 2016:123)。

この推論をもって、『「日本語らしさ」の特徴を個別具体的に示すことで英日翻訳の品質改善につながる。』という作業仮説を得た。この仮説をやや詳述すれば、『指導対象者は前提として日本語母語話者として日本語に対する感性をもっているところ、翻訳指導において日本語の具体的な特徴項目を提示すれば対象者の内省が促がされ、「日本語らしさ」が具体的な形で意識に上り、知性として利用可能なリソースとなる。』ということである。

### 3. 教材冊子の設計上の意図

#### 3.1 冊子のねらい

上記作業仮説に基づき、この冊子では「日本語らしさ」の特徴を具体的に項目別に示すことにした。これを通じて指導対象者に「日本語らしさ」の特徴について振り返りを促す。また、冊子の文中には、「日本語らしさ」を生み出す翻訳という行為のあり方そのものについても考える機会を持たせるようにする。

#### 3.2 使用法の想定

冊子の使用法としては、指導対象者が書簡和訳業務の空き時間を利用し、指導者の勧める特定の項目を閲読することで自習することを想定する。場合によっては指導者が補足説明をする。当室では、業務多忙のため系統だった指導を行う時間枠を取ることが難しく、従来から業務の合間に必要に応じて口頭指導を実施している。なお1回の指導はおよそ5分以下である。このことから、口頭指導を冊子による指導で代替するとすれば、短時間に端的かつ効果的に自習できる教材であることが求められる。

#### 3.3 編集方針

冊子の編集方針として、以下の点に配慮している。

(1) 経験の浅い翻訳者向け

業務での英日翻訳が全く初めての場合を想定する。

(2) 理解しやすい順に項目を配置する

従来の口頭指導(北村 2016)において訳文の改善点が指導対象者にとって気付きやすい順、あるいは理解しやすい順のあることが経験的にわかっていることから、冊子においてはその順序を追うように項目を配置する。

(3) 実務にすぐに使え、翻訳品質に反映する

当室の英日翻訳業務に頻出する類の例文を挙げ、文法構造再現訳と日本語の特徴を生かした翻訳とを対照する。なお、その際の説明として、訳文改善のための見どころを明確に指摘する。

(4) 平易に読みやすく

翻訳学、対照言語学、日本語学等に根拠を置きながらも、術語は厳選することとし、場合によっては厳密な術語よりは、よりわかりやすい、親しみのある用語を用いる。例文と平易な説明から指導対象者の母語話者としての言語感覚にうたえて、「そういえば日本語はこうだったな。」という振り返りを導き、「日本語らしさ」の要素を意識化する。

(5) 空き時間に読める分量

各概念がなるべく見開きで完結するようにする(別紙 1、2 参照)。これは、当室における執務時間内のごく短時間に一つの概念について振り返ることができるよう配慮したものである。

#### 4. 掲載内容概略

##### 4.1 掲載項目

掲載項目は、従来からの口頭指導で指導頻度の高いものを抜粋している。以下に本冊子の「目次」から見出しを引用する。

第1節 日本語の特徴1 —— 人に関する表現の仕方
1 人を指す言葉
2 待遇表現
3 動作主が目立たない表現
4 主人公の立場に立った文
5 日本語の特徴1(人に関する表現)のまとめ
第2節 日本語の特徴2 —— 事実の表現の仕方
1 日本語は動詞が文末に来る言語(SOV型言語)ですが...
2 that節の長い表現からの翻訳
3 動作表現と状態表現:英語と日本語の表現構造の違い
4 主語と主題
5 文章としての特徴

##### 4.2 各項目に関する理論的背景概略

本冊子の掲載項目は、従来の口頭指導で指導対象となった和訳例について、特に頻度の高い事項を中心に、対照言語学、認知言語学(特に類型論)及び日本語学等、言語学諸分野の観点から分析・分類したものである。主に文のレベルに関わる文法項目であるが、文章(テキスト)のレベルについて論じた項目もある。

上記見出しのもと、各掲載項目で論じている主な「日本語学の概念」、及びそれに対応する「日英語の差異」について一覧に示すと以下のとおりである。なお、この表における「日英語の差異」の項目分類は、河原(2009:31)で認知言語類型論における「相同性の項目」として整理されている分類を元に加筆にした(丸カッコ内は加筆部分)。なお、この表で記載している主な術語の定義や詳細については本稿 5.2「各項目の内容詳細」で述べる。

掲載項目	日本語学の概念	日英語の差異
人を指す言葉	ゼロ代名詞 様々な人称表現	代名詞省略 1人称代名詞
待遇表現	対人モダリティ ・待遇表現 ・授受表現 ・敬語丁寧語	(対人モダリティ表現の多寡)
動作主が目立たない表現	主格以外の動作主表現	認知主体のあり方 環境論的自己
主人公の立場に立った文	視点 受身表現	認知モード 話法の本質 与格か間接目的語か 間接受身
日本語は動詞が文末に来る言語(SOV型言語)ですが...	基本語順 モダリティ表現 呼応副詞	状況のとらえ方
that節の長い表現からの翻訳	引用表現	状況のとらえ方
動作表現と状態表現:英語と日本語の表現構造の違い	ナル言語 ・自動詞的表現	情況記述か行為記述か 存在か所有か reference point→targetか trajector→landmarkか 動詞のとらえ方
主語と主題	主題・題述関係 ・主格と主題 ・主題と説明 ・主題の兼務 ・主題表現 ・条件表現 ・Theme/Rhemeとの関わり。	題目か主語か
文章としての特徴	テキストの結束性 接続詞	(推移表現)

本冊子の説明本文作成にあたって日本語の特徴を的確に捉えておくことが重要であるので、日英語の差異については対照言語学、認知言語学(特に類型論)の成果を参照し、さらに、日本語文脈内での表現的特徴については日本語学の成果を参照した。

なお、日本語学は「言語学の一分野としての日本語研究(庵 2012:2)」であるが、日本語を母語としない者に対する教育を想定しながら発展してきた歴史があり(庵 2012:2-3, 322-327)、諸概念の記述にあたって他言語が意識されてきている。そういった経緯から、翻訳教育に応用する際に従来の国語学や国文学よりも親和性があるものと思われる。

#### 4.3 掲載項目の配列方針

ここで、本冊子の掲載項目の配列方針について述べる。

冊子全体の構成として、指導対象者が一見して気付きやすい項目から始め、それを土台として日本語の各特徴の理解へと進めるよう項目を配列している。冊子冒頭には小項目「ゼロ代名詞」を配置したが、これは、日英語における代名詞の明示頻度の多寡が文の表層レベルで

観察しやすいので、理解しやすい項目として冊子全体の導入としたものである。この小項目から始めて、冊子後半部に配置した、日本語の「ナル言語」や「主題・題述構造」という特徴の理解に至るよう、途中各項目の説明を行っている。最終項目では文レベルの議論を行っている。

なお、本冊子は大きく分けて第1節「日本語の特徴 1: 人に関する表現の仕方」と第2節「日本語の特徴 2: 事実の表現の仕方」の構成を取っている。これは文の表現する意味範疇として客観的な意味を表す「命題部分」と、主観的な態度や判断を表す「モダリティ部分」があるところ(辻 2013)、この「モダリティ部分」がさらに聞き手に対する話し手の態度を表す「対人モダリティ」と出来事に対する話し手の捉え方を表す「対事モダリティ」に分けて考えられることから(庵 2001:166-167)、主に対人モダリティにまつわる項目を中心に第1節「日本語の特徴 1: 人に関する表現の仕方」で述べ、命題及び対事モダリティにまつわる項目を中心に第2節「日本語の特徴 2: 事実の表現の仕方」で述べている。

#### 4.4 各項目の内容概略

冊子序盤の項目「人を指す言葉」および「待遇表現」では、冒頭の小項目「ゼロ代名詞」で先ず人称表現が日本語文の表層に現れにくいことを示した上で、続く小項目でそのような環境下で日本語ではいかに人物を特定しているのかについて述べている。

その上で、続いて項目「動作主が目立たない表現」および「主人公の立場に立った文」を配置し、人称表現が明示されていても日本語文では人称表現が控えめに現れる傾向があることについて検討する。その中で、日本語文で自動詞文が顕著であることを例文の中に導入し始める。

冊子中盤では項目「日本語は動詞が文末に来る言語(SOV型言語)ですが...」および「that節の長い表現からの翻訳」で、VO型言語である英語からOV型言語である日本語への順送り訳において、動詞やその近辺の品詞(助動詞、副詞)を実務上どのように処理しえるかという対訳例を例示している。従来の口頭指導において、経験の浅い翻訳者の場合、that節の長い英文からの和訳で読みやすさが劣ることが分かっているが、「that節の長い表現からの翻訳」という項目はそれに対応したものである。ここで提示した「日本語らしさ」を生かした和訳例は、冊子終盤の「状態表現」とも関連をもつ。

冊子終盤の「動作表現と状態表現: 英語と日本語の表現構造の違い」では日本語で自動詞文(本冊子の用語では「状態表現」)が顕著であることを提示している。続いて、「主語と主題」の項目では先ず日本語の「～は～が」構文を提示することで「主題」の概念について指導対象者に気付かせた上で、HallidayのTheme/Rhemeの観点(Halliday, 2014)から英日翻訳では主題・題述構造を保存する方策を採用し得ることを示す。なお、「主題」に関する項目を「状態表現」に関する項目の後に配置したのは、日本語文の典型的な表現形式として「～は～状態表現」という主題・題述構造が認められることから、題述部分における「状態表現」の理解を先に指導対象者に求めておき、その後、助詞「は」を含む文の構造が理解できるように配慮したものである。

最終項目である「文章としての特徴」では、文章の結束性に関わる表現について主題やディスコースマーカを中心に日本語の特徴をテキストレベルで観察している。

## 5. 各項目の内容詳細

以下、本冊子掲載の各項目の内容について冊子掲載順に実際の本文からの引用を交えながら論旨を示すが、紙面の都合から、「ゼロ代名詞」から始めて、「ナル言語」、「主題・題述構造」という日本語の特徴へ導いていく流れを中心に、項目を抜粋して言及する。

### 5.1 冊子第1節「人に関する表現の仕方」

#### 5.1.1 項目1「人を指す言葉」

この項目では、冒頭に導入する小項目として「ゼロ代名詞」を取り上げている。

ゼロ代名詞とは「表層文に現れない仮想的代名詞のことである(久野 1983)。」なお、ここでこの項目を「代名詞の省略」として扱わず「ゼロ代名詞」として取り上げたのは、口頭指導で関係詞の翻訳について説明する際にゼロ代名詞の概念を用いてテキストの結束性を説明するためである(北村 2016:118-122 参照)。

日本語の特徴として代名詞がゼロ代名詞になりやすいこと、あるいは代名詞が省略されやすいことは、日本語生成文法(Kuroda 1965:106-108, 114)をはじめ、日英対照言語学(神崎 1994:118-124)、日本語学(庵 2003:123)で指摘があり、認知言語学では I モード認知あるいは場面内視点<sup>2</sup>に起因するものとして説明されている(中村 2004:46、濱田 2012、2013、2016:25)。

冊子本文ではこの小項目冒頭に以下のように記載し、ゼロ代名詞の概念を導入している<sup>3</sup>。

日本語の文章には、英語や中国語ほどは代名詞が使用されていないように見えます。しかし、「英語の代名詞に対応するのは、日本語の「彼」などの代名詞ではなくゼロ代名詞である」という研究報告があります(神崎 1994)。「ゼロ代名詞」とは、文字として書き表されない代名詞、あるいは音声として発話されない代名詞です。

その後、以下の対訳例を示し、訳文の人称表現をゼロ代名詞に置き換えた場合の効果を示している。ここで、TT1 は指導対象となる和訳例である。

ST: I asked my mother to send me a magazine, but she has never sent me anything.

TT1: 私が私の母親に雑誌を私に送るように頼んだのに、彼女は全然私に何も送ったことがない。

TT2: (φが)(φの)母親に雑誌を(φに)送るように頼んだのに、(φは)全然(φに)何も送ったことがない。

TT3: 母親に雑誌を送るように頼んだのに、全然何も送ったことがない。

TT4: 母親に雑誌を送るように頼んだのに、全然何も送ってくれない。

TT1 は、英語の言語習慣のまま人称表現をすべて明示した例であるが、文が冗長でわかりづらい。TT2 は TT1 の人称表現をすべてゼロ代名詞に置き換えた例、TT3 は TT2 の実際の表記を示している。冊子本文では、TT3 でも ST の文意がほぼ理解できること、TT1 よりは自然な日本語に近いこと、また、さらに工夫する余地があり、それが対人配慮に関わる要素であることを述べた上で、TT4 を示している。そして、この対人配慮については項目 2「待遇表現」で検討する旨述べて、次の項目に繋げている。

なお、本項目では、他に小項目「代名詞以外による表現」を設け、第 1 人称から第 3 人称までの日本語表現についてそれぞれ検討している。

### 5.1.2 項目 2「待遇表現」

項目 1「人を指す言葉」で見たように日本語では代名詞が頻繁に省略されるが、そのような環境下で文中の人物をいかに特定しているのか、その一例をこの項目「待遇表現」で検討する。

待遇表現とは「言語行動の主体が、その言語行動にまつわる人物同士のいろいろな人間関係、言語行動の行われる場所柄や状況、そこで話題になる事柄の性格などを配慮して、言語形式、言語表現、言語行動の諸側面にわたる表現群から、その配慮にもっとも適当な表現形式をえらぶ表現行為、および、それによってえられる表現形式をいう。(亀井ほか 1989:1741)」

待遇表現は日本語では非常に広範かつ顕著である。亀井ほか(1989:1689)は待遇表現について、「一般の語彙の選択...、各種の表現の型の選択...から、文章(談話)の種類を選択、話題の選択、発音上、表記上のさまざまな要素の選択まで、言語体系全般にわたっている。」としている。認知言語学の立場から中村(2004:41)は、「対偶表現<sup>4</sup>も I モードの反映と見てよい。」としている。

冊子本文ではこの項目冒頭に以下のように記載し、「待遇表現」の概念を導入している。

待遇表現とは、「聞き手や話題の中の人物に対して、話し手の尊敬や卑しめの気分を言い表す言語表現<sup>5</sup>」です。敬語や丁寧語も待遇表現です。ここでいわゆるタメ口について考えてみると、同輩どうしの気さくな関係を意識しているからこそできる表現だと言えるでしょう。日本語では話し手や聞き手は、常に人間関係を意識していて、それによって表現が変わることがわかります。日本語では、話し手の聞き手の関係、さらにはその話の中に登場する人物と話し手、聞き手との関係など、人への配慮が巧妙に文章の中に組み込まれています。

小項目「敬語・丁寧語」では訳例として以下の対訳を提示している

ST: I got your reply on the International Transfer.

TT: 以前に、国際移送条約の件でお返事いただきました。

ST: I know you will leave Japan and retire from your office at the end of this month.

TT: 日本をお発ちになるとのこと。また、ご退官なさるとのこと。今月末ですね。

上記の例をもって、「お返事」や「お発ちになる」といった丁寧表現で二人称を省略しながらも文中の人物(you)を特定していることを示している。また、本文中に示唆として、「丁寧語や敬語には人称代名詞が組み込まれているものと考えてもよいでしょう。」と付記している。

なお、この項目ではそのほかに小項目「やりもらいの言葉」として授受表現を、小項目「～てくれる」、「～てもらう」、「～ていただく」として補助動詞による待遇表現を取り上げている。

### 5.1.3 項目3「動作主が目立たない表現」

この項目の主なねらいは、人物の関わる出来事において日本語では動作主が目立たない表現がとられることがあるという特徴を示すことである。冊子本文ではこの項目の冒頭に以下のように記載し、導入としている。

これまで「1 人を指す言葉」や「2 待遇表現」の中で、日本語の表現として人物を指す言葉が文字としてあまりあらわれない様子について見てきました。ゼロ代名詞で代名詞が文字として現れないこと、丁寧語や敬語には人称代名詞が組み込まれていること、待遇表現で恩義の相手が暗黙的に表現されることなどです。

こうして日本語では人物を表す言葉が暗黙的に表現されることが多いのですが、さらに言えば、人物を指す言葉が文字として現れていても、目立たない表現になっていることもよくあります。その一例として、ここでは動作主について見てみます。

動作主とは文の中で動作を行う人を表す言葉です。英語や中国語では「誰々が何々をどうする。」という形の表現をとることがよくありますが、このときの「誰々」という言葉が動作主です。ところがその和訳は、「誰々が」ではなく、別の表現を使ったほうが原文の意図がよく伝わる場合があります。

#### (1) 小項目「「～から」を使った表現」

この小項目では、動作主が「～が」(ガ格・主格)ではなく、「～から」(カラ格・方向格)で表現される例を提示している。カラ格で動作主が表現されることについて西光(2010)は、日本語の他動詞文でガ格(主語)に動作主があるとき、その動作主の責任が強調される印象があるとしている。また、会話文に関する指摘であるが張麟声(1995:49)は、「一人称、二人称動作主をガで受けると、動作主を指定する性格の強い行為提供文、依頼、命令文になり、排他的な意味を帯び、おこがましい感じが生じてしまう。しかし、そもそも起点か経過点の意味を持つカラで動作主を受けると、個としての動作主のイメージが弱められ、相手を刺激しないですむということになる。したがってガが回避されるのである。」としている。この指摘にもあるようにカラ格は本来、起点か経過点といった「場所」を表す名詞格である。ここでは動作主という「人」が「場所」であるかのように表現されているのであるが、一般的にこのように人が場所で表されることについて認知言語学の立場から池上(2000:300-302)は日本語の特徴である「環境論的自己」という概念と関連付けて、日本語では「印欧語での<動作主>(＜行為の主体＞)としての人間というイメージに対応するのは、(そこで何かが出来る)＜場所>としての人間のイメージである」としている。

本冊子では、カラ格動作主の対訳例として以下を取り上げている。

ST : Mom sent me a letter and said her operation was over. ...

TT1: 母さんが私に手紙を送った。そして、母さんの手術は終わったと言った。...

TT2: 母さんから手紙が届いて、手術は終わったとのこと。...

この対訳について、「印象がどのように違うでしょうか。」と読者に問い、日本語母語話者としての言語感覚にうたえ、次に TT1 と TT2 の下線部に注意を促して、次のように提示している。

TT1 は「誰が何をどうした」という表現になっています。日本語ではこうした表現の場合、その人(動作主)の責任が強調されているような印象を持つことがあります。それに比べるとTT2では、「母さん」という方向から「手紙が届いた」という表現になっていて、動作主は強調されずに、主に手紙に着目した文になっています。

## (2) 小項目「動作主が場所であるかのような表現」

この小項目では、カラ格動作主以外に、英語の動作主や受容者が和訳では場所であるかのような表現になっている例を提示している。上記池上(2000:300-302)でも指摘されているが、池上(1982:75)に、「日本語では<人間>や<動作主>という項ですら、あたかも出来事の起こる<場所>であるかの如くしか扱われないということもある。」とされている。なお、動作主の非動作主化については池上(1982:100-105)にさらに考察がある。

この小項目の導入は以下の通り。

今見た「誰々から」という表現で使った「～から」という言葉は、「どこからどこへ」のように場所を言うときに使う言葉です。つまりこれは、人を場所であるかのような言い方をしている一例でした。他にも日本語では人や団体を場所のように表現する言い方があります。

対訳例として以下のとおり。

ST : Osaka Bar Association has received your letter dated September 12, 2015.

TT2: 大阪弁護士会において、あなたの本年9月12日付のお手紙を受領いたしました。

また別の対訳例では、状況説明として「家族の中の会話で、よそに住んでいる娘から手紙が来たかどうかという話題で。」とした上で、以下の文を提示している。

ST : I got her letter.

TT2: 僕のところに来たよ。

## (3) 小項目「他の形で人が脇役になる例」

この小項目では、これまで見た例以外に動作主が脇役になる例として、人物よりもその所有物、あるいは人物よりもその職能や所在場所が目立つ文例を提示している。対訳例として以下のとおり。

ST : My wife has changed her phone number.

TT1: 妻が電話番号を変えました。

TT2: 妻の電話番号が変わりました。

ST : I am going to see the doctor.

TT-a: 病院に行きます。

TT-b: 診察してもらいます。

このように本項目「動作主が目立たない表現」では、動作主をはじめとして、英語と日本語での人物の関わる出来事における表現習慣の違いを例示してきたが、これは同時に、英語から

の和訳では単に語順を変更するという操作だけではない翻訳シフトがあるということを指導対象者に示唆している。これについて小項目「動作主についてのまとめ」では以下のように提示し、翻訳行為のあり方について考えてみるよう促している。

...原文の言葉の形を訳文に引き写すのではなく、実際の文章の中で原文の意味や状況を心の中でイメージし、その上で、日本語ではどのような言葉遣いをすれば元の意味をよりよく伝えることができるのか、表現を選択するとよいでしょう。

## 5.2 冊子第2節「事実の表現の仕方」

本冊子の後半「日本語の特徴2 事実の表現の仕方」では日本語文の命題表現にまつわる特徴を中心に取り上げている。

これまで本冊子の前半「日本語の特徴1 人に関する表現の仕方」では、日本語文において人称表現が目立たない形で表現されやすいという現象を提示してきたが、この現象を認知言語学的に見ると、日本語話者がIモード認知をとりやすいことに起因しているものと思われる(中村 2004:33-48。他に池上 2000=2007、本田 2005、池上 2006、河原 2009:43-44、濱田 2016)。また、この認知モードに起因して表層的には「自動詞文」(後述)としての特徴を呈することがしばしばある。そのため、「日本語らしさ」を生かした訳例としてこれまで冊子本文に提示した例文の中には、ST は他動詞文であるのにその TT は自動詞文として表現されている例文がしばしばある。こういった表現を提示しておく、文章表現に対する感覚の鋭い指導対象者であれば、日本語に自動詞文が顕著であることに気付きはじめるであろう。

それを受けて本冊子の後半「事実の表現の仕方」では、項目「動作表現と状態表現」で日本語の自動詞文について提示し、説明を加える。また、項目「主語と主題」では日本語の主題・題述構造を提示し、次いで日本語文の典型的な表現形式である「主題^状態表現」という構造について指導対象者の理解を促す。

なお、紙面の都合により途中の項目を割愛し、冊子第2節項目3「動作表現と状態表現」以降の内容について述べる。

### 5.2.1 項目3「動作表現と状態表現」

この項目では他動詞文、自動詞文の表現構造の違いについて検討している。

本稿における「自動詞文」の定義は、角田(2009:74)の次の記述による。「自動詞文という用語は *intransitive sentence* の訳語として使う。...一般的に言って、この意味での自動詞文には、述語が自動詞であるもの、形容詞であるもの、名詞であるものの三種類がある。」「他動詞文」の定義は、述語が他動詞である文である。なお、他動性、自動性については角田(2009:67-93)に詳しい考察がある。

ところで、本冊子では他動詞文、自動詞文にそれぞれ動作表現、状態表現という用語を当てているが、一般的でないこの用語を本冊子であえて用いているのは、他動詞文、自動詞文という構文の形式よりも、その構文にどのような認知的な契機があるのかということを指導対象者に印象付けることをねらったからである。

(1) 小項目「原文が動作表現でも」

この小項目では、平易な例文を提示しながら、STが他動詞文であるのにTTが自動詞文として表現される対訳例について説明している。

他動詞文、自動詞文について池上(1981:257)、西光(2010)は、英語ではひとつの出来事を個体(モノ)を中心として他動詞文で表現することが優勢であると指摘し、このような言語を「スル言語」と呼んでいる。一方、日本語ではその同じ出来事を状況(コト)を中心として自動詞文で表現することが優勢であることを指摘し、このような言語を「ナル言語」と呼んでいる。他動詞文は「動作主が対象物に働きかける」という形をとり、自動詞文は「モノやコトの状態を表現する」という形を取る。こういった日英語の差異は英語がDモード認知(場面外視点)、日本語がIモード認知(場面内視点)をとりやすいことに起因するものとされている(中村 2004:33-48。他に池上 2000=2007、本田 2005、池上 2006、河原 2009:43-44、濱田 2016)。

本小項目では導入として先ず、本冊子第1節項目3「動作主が目立たない表現」で見た例をもう一度提示している。以下の通り。

前回と同様、ST はある人が妹に宛てた手紙に出てきた文で、この文のあとに母親の手紙の内容が続きます。

ST : Mom sent me a letter and said her operation was over. ...

TT1 : 母さんが私に手紙を送った。そして、母さんの手術は終わったと言った。...

TT2 : 母さんから手紙が届いて、手術は終わったとのこと。...

ST 及び TT1 は他動詞文、TT2 は自動詞文の例示である。本文で「TT2 では主に手紙に着目し、その内容について書き始めています。ST の後に手紙の内容が続くことを考えると、この場合、TT2 のほうが原文の意図に近いでしょう。」としたあと、ST、TT1 および TT2 の下線部分に注意を促して、次のように提示している。

TT1 の下線部分は「誰が何をどうする」という形の表現になっています。...STもTT1も「動作主がモノ(対象物)に働きかける形の表現」になっていることが分かります。このような表現をここからは「動作表現」ということにします。TT2 の下線部分は「手紙が届いた」ということで、「何がどうなる」という形の表現になっています。言い換えれば「モノやコトの状態や変化を表した表現」となりますが、このような表現をここからは「状態表現」ということにします。この表現では、たとえばSTやTT1では動作主だった「母さんが」が、TT2では「母さんから」という具合に「手紙が届いた」ことの補足情報として表現されています。

この対訳例では、Mom sent me a letterという言葉が翻訳するとき、前後の文章の内容(文脈)からTT2の「状態表現」のほうが訳文として適切でした。このように、ひとつのSTの表現でもTTでは文脈によって動作表現、状態表現のどちらで表現するのが適切かを選択することになります。ただし、一般的に英語と日本語をよく観察すると、英語と比べて日本語では状態表現が多いという傾向があります(池上 1981)。

このほか本小項目では、STが無生物主語文である場合を取り上げ、それに対応するTTにおいて状態表現の方が日常的な表現になりやすいことを訳示し、説明している。

なお、この小項目の掲載内容は、別紙1として添付した。

## (2) 小項目「何気ない和訳でも状態表現になっていることがある」

この小項目では入門レベルの英語教科書に掲載されているような和訳でも、ST の動作表現(他動詞文)に対して TT が状態表現(自動詞文)になっていることを例文をもって示し、自動詞文が日本語文で広範に用いられていることを明らかにしている。

以下は、本冊子に掲載している対訳例である。

	動作表現(他動詞文)	状態表現(自動詞文)
a.	I have two sisters. (他動詞)	私には姉が二人います。(自動詞)
b.	I have 3,000 yen. (他動詞)	三千元あります。(自動詞)
c.	I want magazines. (他動詞)	雑誌がほしい。(形容詞)
d.	My visa was approved. (他動詞)	ビザが許可になった。(自動詞)

なお、本項目では他に小項目「なる」を設定し、動詞「なる」を含む和訳表現について検討している。上記対訳例の内、d は小項目「なる」に掲載している例文である。

## 5.2.1 項目 4「主語と主題」

この項目では日本語の主題・題述構造について提示し、日本語文の典型的な表現形式である「主題^状態表現」という表現について理解を促す。

本冊子でいう「主題」、「題述」は Halliday(2014)における「主題(Theme)」、「題述(Rheme)」の定義に従う。機能的に見て、文が主題と題述から構成されているとき、これを主題・題述構造という。

日本語学において庵(2012:90)はこの主題・題述構造について「題述関係」という用語を用い、「日本語の基本構造は伝達にかかわる題述関係であり、英語(などのヨーロッパ語)の基本構造は述語の一致関係に基づく主述関係である」としている。また、池上(1982:85)は主語と主題について、「主語は述語に対して文法的な支配力を持つが、主題は叙述に対してそのような力はない。主題は、それに続く叙述に対して言わばその舞台を設定するというような働きを持つ。それは(文字通りにも、また比喩的にも)何かが起こる<場所>を前もって示しているものであると考えるとよい。」としている。

日本語では主題が助詞「は」で明示されることがあることなどから、日本語学や対照言語学では「主題」が統語上の概念として議論されることもある。したがって、日本語学における「主題」の概念とHalliday(2014)における「主題(Theme)」の概念とは異なる点があるが、本冊子では機能論を元にこの両概念が重なる事例に絞って取り上げた。

一般に英語が主語優勢言語(subject-prominent language)であり、日本語が主題優勢言語(topic-prominent language)であることについては、池上(1982:73-75)、池上(2000:246-248)、益岡(2004)等で述べられている。認知言語学の立場からは濱田(2016:77)において、日本語がIモード認知(場面内視点)をとりやすいことを述べた上で、「「行為(process)」そのものに意識が向けられるという認識のために、日本語では「行為者」を明示することが必要な場合には、それを「話題(Topic)」として付加し。「は」格で表示されるわけです(Shibutani(1991)、Ikegami(1991)参照。)」としている。

なお、本稿及び本冊子で述べているように、日本語の主題は「は」格以外で表現されることもある。

#### (1) 小項目「「～は～が」という表現」

この小項目では、「～は～が」という構文をもつ和訳について観察する。この構文は主題・題述構造をとる典型的な例であり、後の小項目で検討する「～は」以外で主題が示される主題・題述構造の文への導入として位置づけている。

さらに、「～は～が」構文を本項目「主語と主題」の最初に取り上げるもう一つの理由としては、助詞「は」と助詞「が」が学校文法では共に主語と呼ばれることがあることから、「は」と「が」の両方が一文に現れる構文を提示することにより、「が」は主語を表す格助詞であるが「は」は主題を表す助詞(とりたて助詞の一つ)であることを明らかにするという意図もある。

これに関連して、冊子では「～は～が」構文の「～が」について「主語」という用語を用いているが、厳密な議論では「主格」という用語で説明される助詞である(角田 2009)。しかし、本冊子では義務教育における国語文法、英文法で普及し、指導対象者に親しみのある用語として便宜上「主語」という用語を用いている。

さて、本冊子では対訳例として以下の例文をあげ、英語 ST は SVO という主述関係であるのに、日本語 TT は題述関係になっている場合を提示している。

SVO	～は～が	
[主語]^[動詞]^[対象]	[主題]	^[題述(主語が～)]
Giraffes have long necks.	キリンは	首が長い
I want magazines	僕は	雑誌がほしい。
I have a sister	私には	姉がいます。

続く小項目「「～は」で主題を示すこと」ではとりたて助詞「は」の役割および「は」の格助詞兼務について手短かに説明を加えている。なお、「ハ」の兼務は三上(1960)の用語であり、格助詞「が」や格助詞「を」をとりたて助詞「は」で主題化するとき、「が」や「を」が省略されるという規則を指す(庵 2001:89、庵ほか 2000:242)。

なお、助詞「は」の主要な用法として主題を表すほかに対比の用法があるが(庵ほか 2000:257)、本冊子では言及していない。

この小項目の掲載内容は、別紙 2 として添付した。

#### (2) 小項目「「～は」以外で主題を作る表現」

この小項目では「～は」以外のとりたて助詞で主題が表現(庵ほか 2001:330-338, 346-349)されている和訳例を提示している。ここで例示したとりたて助詞は「～といえば」、「～というのは」、および「～こそ」である。以下の通り。

ST	TT	
SVO	[主題]	^[題述]
The lion suggests bravery.	ライオンと言えば、	勇敢さを連想する。
Dogs are faithful animals.	犬というのは	忠実な動物だ。
Now is the time for action.	今こそ	行動に移す時だ。

## (3) 小項目「場面設定の言葉で主題が示される例」

ここでは TT の主題が条件節で表現されている訳例を中心に、抽象名詞や無生物を主語とする ST の和訳を検討している。また、that 節を含む ST の和訳例を示し、TT が主題・題述構造として翻訳されている様子を概観する。

条件節が主題として分析されることについては龍城(2006:93)に言及されている。また、日本語の条件節と主題に深いかかわりがあることについて庵ほか(2001:357)が解説している。本冊子の例示は以下の通り。

ST	TT	
SVO	[主題(条件節 or「～は」)]	^[題述]
Ignorance of social usage results in many blunders.	社会的習慣を知らないと、	とんでもない失敗に終わることがあるものだ。 <sup>6</sup>
The photo reminds me of your childhood.	この写真を見ると、	君の子供のころのことを思い出す。
Mom said Jenny did not want to go to Poland.	母さんによると、	ジェニーはポーランドに行きたくないとのこと。
	母さんの話では、	ジェニーはポーランドに行きたくないとのこと。

ここで、「～[する]と」は条件を表す形式の 1 つであり、「結果が成立するきっかけとなる状況を示す」事実条件の表現である(日本語教育学会編 2005:167)。また、「～によると」は情報源を表す表現であるが、その由来は条件節である(庵ほか 2001:27-28)。

## (4) 小項目「翻訳で保存されている情報」

この小項目では、英語においても「主題」、「題述」の観点から分析を行うことができることを紹介し、本項目「主語と主題」で検討してきたような翻訳例において ST の主題・題述構造が TT でも保存されていることについて触れている。例文として以下の通り。

	主題	^題述
ST	Giraffes	have long necks
TT	キリンは	首が長い。

## (5) 小項目「日本語と英語の視点や発想の違い」

この小項目では、これまで本項目「主語と主題」で検討してきた内容について、日英語における認知の仕方の違いに起因しているという見方(中村 2009)を提示している。冊子の掲載文は以下の通り。

これまでに見た例文では、典型的には、英語は「誰々が何をどうする。」という表現(動作表現)をしています。日本語では「こうこうこういう場面では、何がどうなる。」という表現(状態表現)をしています。つまり同じ出来事を表現するのに、英語では動作主とその働きかけに着目し、日本語ではある場面の状況に着目しているということです。言語によって物事の見所が違っても言えるでしょう。担当言語ではどうでしょうか。

## 6. まとめ

本冊子の掲載項目は、従来の口頭指導で指導頻度の高いものを抜粋したものである。こうして抜粋された項目はいずれも日英語の対照言語学的特徴として非常に顕著である。ほとんどの項目は、認知言語学で中村(2004)のいう I モード認知が関与しており、池上(1981)のいうナル言語の特徴である。したがって英語からの和訳を産出する場合に翻訳シフトの根幹をなす要素であると言えよう。

本冊子ではこうした日本語の特徴について、日本語文脈の中で具体的にどのように表現されているのか、日本語学の立場から解説を試みた。たとえば、ST で明示されている代名詞が日本語では明示されないのであれば、日本語文脈ではどのようにすれば人物を特定できるように表現できるのか、その課題に応じるべく具体的な例とヒントとなる範疇を示した。また、英語の主題を日本語の主題として表現する際に、日本語ではどのような表現形式があるのか、それについて例示と範疇を示した。

なお、本冊子で提示している「日本語らしさを生かした和訳」は、文脈から離れた単独の ST に対して必然的に対応する TT ではない。そのねらいは、文脈の中で ST の意図するところを日本語らしく表現しようとするときに、翻訳者の選択肢となるよう例示したものである。日本語表現の傾向を説明することで、指導対象者の母語である日本語について振り返りを促し、日本語の特徴を意識化することを主旨としている。

今回の報告では、指導の効果について定量的な評価は行えなかったが、定性的には、冊子提示後に翻訳者の訳文を観察すると、各指導ポイントについてそれ以前とは異なる表現が訳文に見られ、試行錯誤の過程を通じてより日本語手紙文らしい TT が産出されている様子が確認できた。特に人称表現、引用表現等に顕著な効果が表れていた。

現在、本冊子の修正・加筆を順次進めており、指導項目としては名詞の定性(定冠詞付き名詞)、後置修飾の処理、文章の結束性など、従来から口頭指導で取り上げてきた項目を中心に冊子に加えつつある。

.....

### 【著者紹介】:

北村富弘(KITAMURA, Tomihiro)。関西学院言語コミュニケーション文化研究科博士前期課程修了(日本語教育修士)。現在、法務省大阪刑務所国際対策室法務技官(英語、中国語担当)。順送り訳について主に日本語学の知見から観察することに興味を持っている。連絡先: fredchang.kitamura@gmail.com

.....

## 【文末注】:

- <sup>1</sup> 本稿は、第18回日本通訳翻訳学会年次大会での口頭発表(2017年9月10日)「実践報告 日本語の特徴を和訳に生かすためのOJT教材:平易で端的な導入編として」に加筆、修正したものである。
- <sup>2</sup> 「場面内視点」は濱田(2012)の用語であり、Iモード認知を言い換えた術語である(濱田2012:69)。
- <sup>3</sup> 本冊子の指導対象者は主に英日翻訳者であるが、発展的に中国語ほかの言語担当者の利用も想定しているため、例文や説明文に中国語についての言及があり、また、説明文の中ではその他の担当言語の特徴を振り返るよう促している。
- <sup>4</sup> ここでいう「対偶表現」は、中村(2004:41)における例示(42)について一人称代名詞に応じて変化する表現のことを言っているため、待遇表現のことと思われる。
- <sup>5</sup> 松村明(監修)(2018)『デジタル大辞泉』小学館、「待遇表現」の項。
- <sup>6</sup> この対訳はST、TTともに安西(1986)からの引用である。

## 【参考文献】:

- 安西徹雄(1986)『翻訳英文法:訳し方のルール』(新装版)バベル・プレス
- 別宮貞徳(1979)『翻訳読本:初心者のための八章』講談社
- 張麟声(1995)「ガとカラ:能動文における動作主を表す用法」宮島達夫・仁田義雄(1995)『日本語類義表現の文法』(上), 43-52. くろしお出版
- 濱田英人(2012)「日英語話者の視点構図と言語表現」『文化と言語:札幌大学外国語学部紀要』第76号: 69 - 92.
- (2013)「日英語話者の視点構図と事態内参与者の言語化/非言語化」『文化と言語:札幌大学外国語学部紀要』第78号, 75-94.
- (2016)『認知と言語:日本語の世界・英語の世界』開拓社
- 庵功雄(2001)『新しい日本語学入門:ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク
- (2003)『「象は鼻が長い」入門:日本語学の父三上章』くろしお出版
- (2012)『新しい日本語学入門:ことばのしくみを考える』(第2版)スリーエーネットワーク
- 庵功雄ほか(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- (2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- (2000)『「日本語論」への招待』講談社(改題:(2007)『日本語と日本語論』筑摩書房)
- (2006)『英語の感覚・日本語の感覚:<ことばの意味>のしくみ』日本放送出版協会
- 亀井孝ほか(編)(1989)『言語学大辞典』第2巻三省堂
- 河原清志(2009)「英日語双方向の訳出行為におけるシフトの分析:認知言語類型論からの試論」『翻訳研究への招待』第3号. 日本通訳翻訳学会
- 神崎高明(1994)『日英語代名詞の研究』研究社出版
- 北村富弘(2016)「日本語学の概念を応用した英日翻訳者教育:OJT 指導実践報告」『通訳翻訳研究への招待』第16号. 日本通訳翻訳学会
- 久野暉(1983)『新日本文法研究』大修館書店

- 水野的(2016)「サイトトランスレーション:情報構造の視点から」日本通訳翻訳学会サイトラ研究プロジェクト公開研究会
- 水谷信子(2001)『日英比較話しことばの文法』(続)くろしお出版
- 益岡隆志編(2004)『主題の対照』くろしお出版
- 森田真砂子・清水武雄(2002)「日英翻訳における Theme について」人文・社会科学(編)『群馬大学教育学部紀要』第 51 号: 167-185. 群馬大学
- 長沼美香子(2001)「日英翻訳における Theme に関する課題」山口登(編)『JASFL Occasional Papers』第 2 巻第 1 号: 115-127. 日本機能言語学会
- 中村芳久(2004)「主観性の言語学:主観性と文法構造・構文」中村芳久(編)『認知文法論』大修館—— (2009)「認知モードの射程」坪本篤朗ほか(編)『内と外の言語学』開拓社
- 日本語教育学会(編)(2005)『新版 日本語教育事典』大修館書店
- 西光義弘(2010)「「する」言語と「なる」言語を考え直す」[Online]<[http://www.gengoj.com/seminar/view.php?seminar\\_list\\_id=2](http://www.gengoj.com/seminar/view.php?seminar_list_id=2)>(2016 年 9 月 24 日)
- 尾野治彦(2008)「絵本における日英語の推移表現の比較:臨場的スタンスと外置的スタンスの観点から」『北海道武蔵女子短期大学紀要』第 40 巻, 37-99.
- 丹波哲也(2004)「主語と題目語」北原保雄(2004)『朝倉日本語講座』第 6 巻. 朝倉書店
- 龍城正明(編)(2006)『ことばは生きている:選択体系機能言語学序説』くろしお出版
- 辻幸夫(編)(2013)『新編 認知言語学キーワード事典』研究社
- 津田守編(2008)『法務通訳翻訳という仕事』大阪大学出版会
- 角田太作(2009)『世界の言語と日本語:言語類型論から見た日本語』(改訂版)くろしお出版
- 時枝誠記(1955)『日本文法口語篇』岩波書店
- 渡辺実(1971)『国語構文論』塙書房
- 渡辺由紀子(2003)「法務通訳翻訳の世界:その多様性と将来性」『通訳研究』第 3 号: 122-135. 日本通訳学会
- 山梨正明ほか編(2003)『現代言語学の潮流』勁草書房
- Halliday, M. A. K. & Matthiessen, C. M. (2014). *Halliday's Introduction to Functional Grammar* (4th ed.). Routledge.
- Kuroda, S. Y. (1965). *Generative Grammatical Studies in The Japanese Language* (Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology).

別紙 1

<p>3 動作表現と状態表現：英語と日本語の表現構造の違い</p> <p>3.1 原文が動作表現でも</p> <p>「動作主が目立たない表現」で見たと同様、ST はある人が妹に宛てた手紙に出てきた文で、この文のあとに母親の手紙の内容が続きます。</p> <p>ST : Mom sent me a letter and said her operation was over. ...</p> <p>TT1 : 母さんが私に手紙を送った。そして、母さんの手術は終わったと言った。...</p> <p>TT2 : 母さんから手紙が届いて、手術は終わったとのこと。...</p> <p>TT1 と TT2 を比べてみると、TT1 は「母さん」が強調されているような感じがしますが、TT2 では主に手紙に着目し、その内容について書き始めています。ST の後に手紙の内容が続くことを考えると、この場合、TT2 のほうが原文の意図に近いでしょう(p.80-81 参照)。</p> <p>ここで、TT1 や TT2 の下線部分について詳しく見てみます。TT1 の下線部分は「誰が何をどうする」という形の表現になっています。これは ST の文法構造をそのまま、語順だけ変えた訳文です。ST や TT1 で、各単語の役割を見ると、</p> <p>動作主 : mom (母)</p> <p>働きかけ : sent (送った)</p> <p>対象物 : a letter (手紙)</p>	<p>この例で、動作表現と状態表現とで文の印象はどのようなように違うでしょうか。ちなみに、目印として上の例で「～が」が付いている言葉に注目してみてください。それが主語です。動作表現と状態表現とでは主語になっている言葉が違っています。また、動詞を見ると、動作表現では「何々が何々をどうする」という形で他動詞になっています。英語の文型という SVO です。一方、状態表現では「何々がどうなる」という形で自動詞になっています。OV という形です。これも動作表現と状態表現それぞれの特徴です。</p> <p>さて、特に ST で人間や動物でなくモノが主語（無生物主語）になっているときに、和訳で動作表現にしたのでは非日常的な日本語になることがあります。</p> <p>ST : The storm split a branch off from the main trunk. (Oxford 2005)</p> <p>TT1 : あの嵐が枝を幹から裂いた。</p> <p>TT2 : あの嵐で、枝が幹から裂けた。</p> <p>TT1 と TT2 の印象を比べると、TT1 はいかにも嵐が荒々しくて、風の力が枝を裂いたという劇的な印象があるでしょう。TT2 はむしろ、嵐が去った後、枝がどうなったのかを表現しているという印象があるでしょう。</p> <p>例えば普段の日本語の手紙の中で家族に台風被害を報告するときに TT1 のような表現を使うでしょうか。映画や小説、詩などで意図的に TT1 のような劇的な表現を使うことがあっても、TT1 のような表現は日常会話や手紙文ではあまり見かけないのではないのでしょうか。どちらからいえば TT2 のほうが日常的な表現だといえそうです。</p> <p>ここで ST や TT1 は「嵐」を動作主とした動作表現です。一方、TT2 は「枝」がどうなったかについて表現した状態表現です。つまり、TT1 は「嵐」が「枝」に働きかけたという表現ですが、TT2 は「嵐」という場面で「枝が幹から裂けた」ということを表現していますから違った印象を持つわけです。</p> <p>ここで、もうひとつ、対訳例を見てみましょう。</p> <p>ST : The photo reminds me of your childhood.</p> <p>TT1 : この写真が私に君の子供のころを思い出させる。</p> <p>TT2 : この写真を見ると、君の子供のころのことを思い出す。</p> <p>ここで ST は「photo(写真)」を主語とした SVO という形の表現です。SVO という形は動作表現と同じ形です。ここで remind (思い出させる) という言葉は別に対象物 O (me;私) に向か働きかけているわけではありませんが、このような場合でも英語では動作表現と同じ SVO という形をよく使います。TT1 は ST の語順だけを変えた訳文です。一方、TT2 は「この写真を見ると」という場面設定で始まり、その場面の中で「君の子供のころのことを思い出す」という状態を表現しています。場面・状態という順で表現されている状態表現になっています。これまでのことから ST が動作表現であっても、和訳を書くときには状態表現が適している場合があることが分かります。文脈を見ながら書き手の意図を汲んで和訳でどう表現するかを決めていくことになっていきます。安易に英文と同じ形式で日本語を書いても、書き手の意図を再現できるとは限りません。</p>								
<p>TT1 と TT2 の下線部分について詳しく見てみます。TT1 の下線部分は「誰が何をどうする」という形の表現になっています。これは ST の文法構造をそのまま、語順だけ変えた訳文です。ST や TT1 で、各単語の役割を見ると、</p> <p>動作主 : mom (母)</p> <p>働きかけ : sent (送った)</p> <p>対象物 : a letter (手紙)</p> <p>となっていて、すると ST も TT1 も「動作主がモノ(対象物)に働きかける形の表現」になっていることが分かります。このような表現をここからは「動作表現」ということにします。TT2 はどうでしょうか。TT2 の下線部分は「手紙が届いた」ということで、「何がどうなる」という形の表現になっています。言い換えれば「モノやコトの状態や変化を表した表現」となりますが、このような表現をここからは「状態表現」ということにします。この二つの表現では、たとえば ST や TT1 では動作主だった「母さんが」が、状態表現である TT2 では「母さんから」という具合に「手紙が届いた」ことの補足情報として表現されています。</p> <p>この対訳例では、Mom sent me a letter という言葉を翻訳するときに、前後の文章の内容(文脈)から TT2 の「状態表現」のほうが訳文として適切でした。このように、ひとつの ST の表現でも TT では文脈によって動作表現、状態表現のどちらで表現するのが適切かを選択することになります。ただし、一般的に英語と日本語をよく観察すると、英語と比べて日本語では状態表現が多いという傾向があります(池上 1981)。</p> <p>そこで、動作表現と状態表現の違いを感覚としてつかめるように、日本語の例文を少し見えておきます。</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>動作表現</th> <th>状態表現</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>(～をどうする)</td> <td>(～がどうなる)</td> </tr> <tr> <td>兄が私に電話をかけた。</td> <td>兄から電話が来た。</td> </tr> <tr> <td>雨が石をくぼませる。</td> <td>雨で石がくぼむ。</td> </tr> </tbody> </table>	動作表現	状態表現	(～をどうする)	(～がどうなる)	兄が私に電話をかけた。	兄から電話が来た。	雨が石をくぼませる。	雨で石がくぼむ。
動作表現	状態表現								
(～をどうする)	(～がどうなる)								
兄が私に電話をかけた。	兄から電話が来た。								
雨が石をくぼませる。	雨で石がくぼむ。								

別紙2

もし仮に E1~E3 の主語・述語の構成をそのまま残して、語順だけ変えて日本語にしたとしたらどうなるでしょうか。「キリンが長い首を持っている。」「私が雑誌を欲している。」「私たちが姉を持っている。」のような和訳になります。こういった和訳は、手紙文の翻訳としてはあまり日本語らしくないでしょう。

このように、英語と日本語では同じ物事を表現するにも、その仕方が違うことがあります。そこで一般的に言うと、日本語らしい和訳をするには、翻訳者は一度読み手となって ST を原語の世界の中でよく読み込み、ST の表現している状況をしっかり把握した上で、改めて日本語で表現しなおすという方法をとりまします。

4. 2 「～は」で主題を示すこと

ここで、「～は」で主題を示すことについてもう少し日本語学から学んでおきましょう。たとえば、「父さんがクッキーを妹に送った。」という出来事があったあと、「あのクッキー、どうしたの?」と言われれば、

(1) クッキーは、父さんが妹に送った。

と言うでしょう。ここではクッキーがすでに話題に上ったので、それを受けて「クッキー」を文の主題にしています。「クッキー」に「～は」が付いています。

また、先ず「父さんが弟にチョコレートを送った。」という出来事があったあと、「父さんがクッキーを妹に送った。」という出来事があったとしたら、「妹は?」と言われれば、

(2) 妹には、父さんがクッキーを送った。

と言うでしょう。今度は「妹」が話題に上ったので、「妹」を文の主題にしています。「妹」に「～は」が付いています。このように同じように「父さんがクッキーを妹に送った。」という1つの出来事であっても、日本語ではその場その場の話題によって文の主題を変えて表現することができます。場合によっては、

(3) 父さんは、クッキーを妹に送った。

という表現もあるでしょう。ところで「父さんがクッキーを妹に送った。」という言葉と比べてみると、(2)のように「妹に」という部分を主題にするときは、「妹には」というように、「は」のほかに「に」もそのまま付いているのですが、「クッキーを」や「父さんが」を主題にするときは、「は」だけで、「～をは」とか「～がは」という言い方はしません。ここでは、「～は」が「を」や「が」の働きを兼用していると言えます(庵 2001:89)。

なお、「は」や「が」は話題や主題を示すほかにも連った働きをすることもあります(庵 2001)。詳しくは巻末の日本語学や日本語教育学の本が参考になります。

4 主語と主題  
ここでは日本語の文に特徴的な「主題」について見ておきます。英語は物事を言葉で表現するときに、主語・述語(S+VO)で表現するのが典型的ですが、日本語では主題・題述で表現するという特徴があります。ここで主題・題述というのは、たとえば、「冬は鍋がおいしい。」という文だと、「冬」が主題で、「鍋がおいしい」が題述です。主題とは1つの文の中で話の場面を設定する部分です。題述とは、主題という場面設定をもとに、話を展開していく部分です。この「冬は鍋がおいしい。」という文では、「冬は」という言葉でこの文の場面が設定されている、その場面の中では「鍋がおいしい」ということが語られているというわけです。

主題は、「冬は」のように、「～は」という言葉をつけて表現されることがよくあります。また他に、「～すると」のように条件を設定する言葉で表現されることもあります。以下では、この日本語の特徴について、英文からの和訳を見ながら考えてみてみます。担当言語と比べながら考えてみてください。

4. 1 「～は～が」という表現

下の例の「～は～が」という表現では、「～は」の付いている言葉が文の主題です。

- J1: キリンは首が長い。 主題: キリン 題述: 首が長い (主語: 首)
- J2: 僕は雑誌がほしい。 主題: 僕 題述: 雑誌がほしい (主語: 雑誌)
- J3: 私には姉がいます。 主題: 私 題述: 姉がいます (主語: 姉)

例えば J1 では、「キリン」という場面設定の中で、「首が長い」というふうな話が展開されています。「キリン」が主題で、「首が長い」が題述です。この題述の中では、「首」という単語が「長い」の主語です<sup>1</sup>。

ところで、上の例文 J1~J3 にあたる状況をそれぞれ英語で表現すると、例えばこういいた言い方がありません。

- E1: Giraffes have long necks.
- E2: I want magazines.
- E3: I have a sister.

E1 を見ると、主語が Giraffes で述語が have long necks ですが、S+VO の構成です。J1 の主題・題述の構成とは違った表現になっていることが分かります。ここに挙げた他の対訳例も英語は主語・述語の構成で、日本語は主題・題述の構成になっていることがわかります。

<sup>1</sup> 主題は、テーマ(theme)、主題、提題表現、トピックともいう。題述はレーマ(theme)、コメント、叙述ともいう。  
<sup>2</sup> 「ハ」の機能は基本的には文の「主題」の表示である。(池上 1982:85)  
<sup>3</sup> 「主題は述語に対して文法的な支配力を持つが、主題は叙述に対してそのような力はない。主題は、それに続く叙述に対して言わばその舞台を設定するというような働きを持つ。それは(文字通りにも、また比喩的にも)何かが起る<場所>を前もって示しているものであると考えよう。(池上 1982:85)」